

# ふるさと再発見

「ふすま解体ショー」始末記

土蔵（現・袖クッチーナ ナチュラーレ）に残されていたものである。ちなみに北川家は一九〇六（明治三十九）年の宇治山田市の初代市長北川矩一を輩出した家である。明らかに江戸時代の下張りであることを確認した襖が六枚あったが、時間の都合で一枚しか解体できなかった。しかし収穫は大きかったのである。

十月に伊勢市であった河崎商人市は天候にも恵まれ、人もいつも以上にあったよつである。おかげで「ふすま解体ショー」も想像以上の参加者に恵まれた。なかでも三重大学の学生ら若者が加わってくれたことは喜びに堪えない。ともかくこんな地味なイベントに興味を持ってくれた人々に、心から感謝したいと思っている。

今回解体した襖は、河崎南町にあったみそ・しょうゆ問屋の北川治郎兵衛の旧

解体の手順は名古屋から来てくれたプロの古文書修復師の指導の下、支障なく進み、後半では一般の方にも実際に下張りを剥がしていただいた。途中さまざまな点で教えてもらったプロのテクニクはとても勉強になったのである。この解体の手順は伊勢志摩ビデオサークルの井上博司氏が動画を撮影・編集してDVDにしてくれたので、参考にしたい方はいつでもお申し出いただきたい。さて今回の一番大きな収

## 江戸時代の人の家特定



種が、写真の人名が書かれている紙である。辻村藤兵衛、河村源八など名字のある人物が六人、名前だけの人物（おそらく番頭？）が六人書かれている。何かの組合らしいのだが、さすがにこれだけでは分からない。これをもとに午後からは「ミステリー町歩き」を

解体で人の名の書かれた紙が現れたふすま＝伊勢市内で（永井功さん提供）

行った。  
この紙だけでは何も分からなれないと思われるだろうが、私たちには河辺七種神社で保存されていた史料の中に河崎の各字のごとですべての人名が入った絵図がある。そしてそれを見ながらこの紙に出てくる人の家をたどると、ほとんどの人物の家が特定されたのだ。  
この様子はインターネットのプロク「神宮巡々3」の十一月二日の記事に詳しく紹介されているので、それを見ていただければ幸いである。ちなみに今回名前が出てきた辻村藤兵衛の家は現古本屋ぼらんの所である。時代的には四代目藤兵衛であると思われるが、伝えるところによると三代目、四代目も俳諧に夢中になり過ぎて仕事は番頭まかせであったらしい。もしかするとこの優秀な番頭は名字のない六人の中にいるかもしれない。残りの五枚の襖の中に答えが隠れているかもしれないと思うと楽しい。襖解体は定期的にやっていくつもりなので、結果は紙上でお知らせしたい。  
今回の結果はいうなれば、これが河崎のすごさだ。全国的にも珍しい字ごとの絵図を有し、しかもその絵図に出てくる建物が一部であれ現存している。住人が変わっても鬼瓦などから過去の人物が特定できる。こんな町は全国探してもほとんどないと言われている。  
しかしながら今、河崎では古い家が将来的になくなってしまつかもしれない恐れが出てきたという。それが町の意思であれば仕方ないことではあるが、少なくとも次の時代を担う住民の判断を大事にしたいと思っています。（奥村薫・古書店主＝伊勢市）